

2007年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2007年8月27日(月)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A(北島中学校教諭)

パネリスト B(神山東中学校教諭)

C(1996年度板野中学校卒業生)

D(1996年度板野中学校卒業生)

《司会》

ただいまより、「鳴門市人権地域フォーラム」を始めさせていただきます。まず初めに、主催者を代表しまして、鳴門市教育委員会 古林教育長がごあいさつを申し上げます。

《鳴門市教育委員会教育長》

皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは。’)鳴門市教育長でございます。お盆を過ぎたと言いますのに、連日30度を越えるような大変厳しい暑さの毎日でございます。にも関わらず、会場いっぱいにお越しをいただきまして、たくさんの方をお迎えできて、2007年度の「鳴門市人権地域フォーラム」が開催できますことを、主催者の1人として大変ありがたく、お礼を申し上げます。ありがとうございます。

皆様方には、日頃、同和問題をはじめさまざまな人権問題の解決と、基本的人権が尊重される町づくりの推進に格別のお取り組みをいただきまして、心から敬意と感謝を申し上げるところでございます。皆様のご理解と、各地域や職場におけますお取り組みのおかげによりまして、本市の人権教育も日々着実に前進しているものと喜んでおります。しかし、いまだ差別の完全な解消には至っておりませず、一人一人の人権が充分保障されているとは言えない状況もございます。まだまだ深刻な人権問題が存在をしております。

最近の新聞等を見ましても、「児童虐待」や「殺人事件」等、人命を軽視した事件が後を絶たず、なおいっそうの人権教育・啓発の取り組みが急がれるところでございます。

今から申し上げるまでもございませませんが、人権問題の解決は私たち一人一人の課題であり、私たち自身が、人権尊重の担い手であることを深く認識すると共に、人権問題を自分自身の問題として捉え行動することが何よりも大切であります。人権が尊重された社会を実現するためにも、ぜひ、皆様方お一人お一人の一層のご努力をお願いを申し上げます。

本日のフォーラムは、先にお配りをいたしました「チラシ」にも書いてありますように、『ひとつと』から『わがこと』へ』をキーワードとしまして、今から15年ほど前に、それまでは「学級」という単位で行なわれていた人権問題学習を、「学年」や「学校全体」という、大きな単位で学習するという新しい学習形態で、同和問題や人権問題学習に取り組んでこられました、板野中学校の当時の先生と生徒さんによる、パネルディスカッションを計画いたしました。

この「全体学習」は、今では人権問題学習の一つのスタイルとして、多くの学校に取り入れられ、「チラシ」の裏面にも書いてございましたが、その学習を観た多くの人々の素晴らしい評価を得ているところでございます。本日は、「自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習」をテーマに、人権教育の可能性やよろこびを探求し、お互いの人権感覚や人権意識を高め、人権の町づくりの創造につながる、実り多い研修になることと期待をいたしております。

最後になりますけれども、本年度も、この、「人権地域フォーラム」の開催にあたり、ご協力をいただき

ました、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町の人権教育協議会、並びに各教育委員会の皆様方、また、本日の出演を快くお引き受けくださいました、コーディネーター、パネリストの皆様方に感謝を申し上げ、開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうぞ最後までよろしくお願ひいたします。(拍手)

《司会》

どうもありがとうございました。では、早速でございますけれども、本日の「人権地域フォーラム」にお招きいたしました講師の方々をご紹介させていただきます。おそれいりますけれども、お名前をお呼びいたしました講師の皆様は、順次、壇上のお席の方へご移動くださいますようお願いいたします。

まず初めに、本日のコーディネーターを担当していただきます、北島中学校教諭、Aさんです。(拍手に迎えられるように、一人ずつ壇上に準備された席に着く)続きまして、パネリストとして、ご教授いただきます方々をご紹介させていただきます。神山東中学校教諭、Bさんです。(拍手)同じくパネリストにお迎えしています、1996年度板野中学校卒業生のCさんです。(拍手)最後になりましたが、同じく1996年度板野中学校卒業生のDさんです。(拍手)全員席に着いたことを確かめて)以上、本日は4人の講師の皆様方に、『ひとごと』から『わがこと』へ ～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～というテーマで、フォーラムを進めていただきます。それではA先生、進行につきましてよろしくお願ひいたします。

《コーディネーター A》

こんにちは。(会場から「こんにちは」元気な声が返る。会場いっぱいの参加者に対し、しばらく会場整理がおこなわれる)本当にありがとうございました。会場いっぱいの皆さんが集まっていただきました。

1996年、今から11年12年が経過していますが、板野中学校で、1年・2年・3年と3年間積み上げてきた同和教育の実践の中で、人権教育というものが、正に子どもたちの命を守る、その命を輝いたものにしていく取り組みになったんです。その教育の可能性と重要性を、私たちは実感してきました。

本当に厳しい現実があります。今現在、私は北島中学校で子ども達との日常があるわけですが、北島の子ども達にとって、「同和問題」というのはなかなか自分のことにはなりません。それはなぜかというと、日常の中で地区の子と関わることがあまりないです。「同和問題はどこにあるの？」そういう意識です。

地区別の懇談会で「同和問題」をテーマにしても、「何で、いつも同和のことを一番にするんだ。」そういう意識があります。それは、どうしてそうなるかと言うと、日常の中で地区の人たちの思いに触れる、そういう、地区と地区外の交流というのがなかなか進んでいない現実があります。

板野中学校において、私は3年間、この3人の中間と学年を同じくするわけですが、クラスの中に、同和地区の子どもが、多いクラスは10人近く、少なくとも5人位あって、そして、自分の言葉で自分のことを語ってくれたら、それはやっぱり、なかなか「ひとごと」にはなりません。その仲間の思いに触れて、「わがこと」として考えていく自分があります。私たちが置かれている現実はみな違います。家族の中に、重い障がいを持った家族がおって、そのことにいっぱい思いを持って生活されている方があります。

私たちがどんな状況に置かれても、やっぱり、幸せに生きる権利があります。幸せに生きるために今を生きています。そんな学びが、同じように実感できる地域のつながり、私たちの地域社会を作っていきたいと思うんです。それはやっぱり、自分の言葉で自分のことを伝える。そして、いろんな思いを聞く。そういう、人間の豊かなつながりの中に、そんな営みが生まれてくるし、そんな生活が実現してくると思うんです。

私にとっても、パネラーとして一緒にこの壇上に上がっていただいているB先生にとっても、こういうことはなかなかないんですけど、同じ学年の子どもたちを、1年・2年・3年と一緒に持ち上がってきました。出会った時から3年間営まれた教育。正に、「命をキラキラと輝かしていく取り組み」になったことを実感するんです。でも、現実の社会の中に、やっぱり差別は厳然と存在します。

1年・2年と積み上げてきた学習の中で、生徒が3年になった5月、母の日、お母ちゃんに、精いっぱい
の思いを伝えていこうと、妹と友だちと3人でカレーライスをつくっていました。これはD君なんですけど、
カレー作りを楽しんでいる彼の家に、1本の電話がかかってきました。名前も名乗らん大人が唐突に問うん
です。「あなたの家は同和地区ですか？」と。

1年・2年・3年と、しっかりとこの学習をしてきた彼は、「どうしてそういうことを聞くのか」、「その
底にある思いは何なのか」ということ、それをきちんと問い返します。差別する愚かさを必死に伝えてい
こうとします。必死に話をします。食い下がる中学生に、電話をかけてきた大人は、絶対に許すことのできな
い言葉を突きつけます。

中学1年生の時に、私は社会科の教師として、彼らに江戸時代の身分制の学習をしました。その中で、「士
・農・工・商・えた・非人」と教えています。そんな差別を引きずっている社会があることも教えてきまし
た。「えた・非人」ということは教えてきましたが、私は、小さい「っ」がつく言い方は全く彼らにしたこ
とがありません。その電話をかけてきた大人は、「おまえの家はエツタか」と言いました。その言葉に、何
とも言えん気持ちを彼は嘔みしめ、悶々とした時間を過ごします。

皆さん、もし、1年・2年・3年と罪上げていく、同和教育の営みがなかったら、全く違い形に、彼の状
況はなったと思うんです。揺れました。苦しみました。いろんな思いをかみ締めました。一緒にカレーを作
っていた友だちに「帰ってくれ」と彼は言います。そして、1人長い時間を過ごして、いろんな思いを嘔み
しめながら、C君に1本の電話を入れるんです。皆さん、1本の電話で救われるんです。小学校、中学校、
高校、大学と、いろんな人権の取り組みがあります。行政の中で、いろんな人権の取り組みがあります。ど
んなことがあっても切れん。この仲間だったらこの気持ちが言える。そんな仲間の関係を作るために、こ
の学習があるんです。

D君からの電話で、C君もビビった。でも、C君が言います。「父ちゃんと母ちゃんにも言うわけ。明日、
先生に話しせんか。」苦しくて、苦しくておれん。辛くて、辛くておれん。その思いを、彼は毎日綴ってい
る「生活ノート」にビッシリ書いたんです。

そこに、差別をなくしていくという教育がなかったら、知らないうちに子どもは潰されます。不安定な状
況に置かれ、自暴自棄にもなります。でも、人と人との豊かにつながっていく私たちの学びがあったら、地
域のつながりがあったら、職場の関係があったら、学校での豊かな人間関係があったら、「マイナス」を「プ
ラス」に変える力が生まれるんです。D君がこう綴りました。

「D君の生活ノート」

やっぱりやさしかった。つらいなーって思った。

今日ぼくは生まれて初めて、全然知らん他人から、部落差別を受けた。ずばーと受けた。

家に電話がかかってきた。親は二人で出かけていて、ぼくは妹とTとっしょにカレー作りを楽しんでいた。

電話の内容はこうだった。「ちょっと調べよんやけど、あんたのとこ、同和地区だろ。あんたのとこ『えった』だろ。」と
いうものだった。

ぼくは、「えっ、すいませんが、そんなん聞いて、何になるんですか？」とか、いろいろ対応したけど、「『えった』なん
だろ」としか言わん。

「『えった』ちがうん、『えった』だろ」。ぼくは「そうだったらどうしたんですか」と言った。プツー…、電話が切れた。

何なんなって思った。くやさかった。自分の顔が真っ青になっているのが感じられた。これが部落差別なんか……。

生きとる心地はしていた。これがぼくが受ける差別なんか。ほんまビビった。いったい何んなこれは……。

みんなに打ち明けたかった。でも、こんなしんどいことでみんなが悩まないかんのや、ほんとバカらしい。こんな思
いをするん、ぼくだけでいいわと思った。

人間ってバカやなーって思う。なんでこんなにこだわるんかって感じた。ぼくは人間不信になってやろうと思った。とにかく、くやしかった。すまんけど、Tには帰ってもらった。ぜんぜん笑えなかった。考えた。一人で考えた。くやしかった。自分も含めてみんなバカじゃーって思った。Cに電話した。Cもビビっていたけど、いっしょになぐさめ合った。ちょぴりパワーが出た。やっぱり親に話そうと思った。

親に言った。「なんでも困ったこと話できるんが家族でー」と言ってくれた。うれしかった。でも、くやしかった。絶対卑怯じゃわ、言いたいこと言うて切りまあーって、むかつくわ。

母が言った。「ほんなん言う人は悲しい人間なんじゃわ。そんなに負けたらあかん。世の中、ほんなんばっかりでないわよ。落ち込んだら負けてよ。」

ぼくはずーっと電話待った。今も待っとる。でも掛かってこん。その人は差別しよんのに……。会いたい。

でも、これが部落差別なんじゃわ。ぼくは開き直ってしまいそうになる。

ぼくの解放運動。本物の解放運動。差別者の意識を変えるのが運動なんだと、ぼくは思っている。いろんな子にこのことを話そう。もちろん、Tにも……。」

つながりがなかったら、交流がなかったら、「そんな差別、どこにあるん。」そうなるんです。でも、その現実に深く学ぶということがなかったら、知らん間に人間を追い込んでいきます。あるのにないことにしてきたら、生きる力は奪われていきます。

私たちは、どんな状況に置かれても、誇りを掲げて生きる、幸せに生きる、そんな町を創る。そんな地域社会を創る。それが、今日、ここに掲げているテーマである、『ひとごと』から『わがこと』へ」なんです。

人間の悲しみが見えなくて、本当の姿は見えてこないと思うのです。2人の思い、必死につながった当時の仲間の先生の思いに出会っていただいて、今日は中学生もたくさん集まってくれました。様々な年代の人から、いろんな思いを出していただきながら、「人権を学ぶ」ということが人間をこんなに豊かにしていく。そんな時間を皆さんと共有できたらと思います。

私は、昨年度の香川県の「人権教育研究大会」で、こんな形で、D君とC君と共に話をしました。そこに、いろんな思いがあふれました。今日は、私たちにとって地元です。本当に本気で考えていく人、「わがこと」として考えていく人が増えていく、そんな願いの中で仲間が語っていきます。それでは、D君いきましょうか。皆さん、拍手をお願いします。

《パネリスト D》

こんにちは。(会場より「こんにちは」)河内町で農業をしています。Dです。

さっきのA先生の話の中で、中学3年生の時の「生活ノート」を読んでもらったんですけど、やっぱり、今、10年の月日が流れても、何度聞いてもやっぱり悔しい思いがします。

でも、今日、ここに立たせてもらって話を聞いてもらっているんですが、悔しかったことや辛かったことを言いに来たのではなくて、いろんな価値観や生活はみんなバラバラですが、この問題について一緒に考えていきたいです。「こうして話ができるということを広げていきたいな」と思って生活しています。

(コーディネーターに向けて照れくさそうに)頭が真っ白になってしまったわ。話し出したら。(コーディネーターは、Dさんの言葉を楽しそうに笑いながら受け止める。その笑顔に後押しされるように、Dさんは言葉を続ける)

こんなことは、言っても言わなくてもいいことかもわからないのですが、僕のお父さんは差別を受ける立場に生まれて、お母さんと結婚して僕は生まれましたが、このことはすごく大事なことだし、(生き生きとうれしそうに)おもしろいことという言い方は変ですが、僕は、このことを考えることがすごく好きです。

中学校の時にA先生と出会って、板野中学校の全体学習で、自分の立場のこととか、みんなの思いを熱く

語り合う3年間があつという間に過ぎて、自分のお父さんとお母さんが結婚して、自分が辛い思いをしたこととか聞く中で、僕は、小さい時はあまり学習もしていなかったの、「お父さんとお母さんが辛い思いをしたんだ。それで僕は部落差別を受ける立場になったんやな。」と、すごいマイナスに思ってしまった。「何で僕がこんな差別を受けるんだ」と思いました。でも…、(涙ぐみそうになる自分を必死に振り払うように)すみません。そういう中で、そういう思いが間違いであるということ、中学校で、仲間のみんなのおかげで学ばせてもらいました。

僕が生まれた時に、僕のお母さんのふるさとはすごく大きな農家だったんですけど、お父さんが、1人娘を取ってしまって、…お父さんや、お母さんや、母方の祖父母が、僕に小さい時から「農業してくれ」と言ってくれて、自分のこととか差別のことを知った時に、僕は、「農業をしたい」と思いました。

差別があることで、「僕ら差別を受ける立場の者がしんどい思いをしているんだ」と思っていたんだけど、この学習を積んでいく中で、「部落差別によってしんどい思いをするのは、地区、地区外関係ない」と、僕は思いました。

「お父さんとお母さんが結婚する時も、(泣きながら、ポケットに手を入れながら「ハンカチ忘れてきたわ」コーディネーターを見ながら照れ笑いになる)僕の大好きなじいちゃん、ばあちゃんも、こんな部落問題などがなかったら、もっとみんなが幸せでなかったのかな」なんて、こんなことを考えても仕方ないんですけど、そういうことを思うし、中学校でこういう学習を積んでいって、農業をしたいと思って、高校も大学も農業系の学校へ行って、大学を卒業してから今5年くらい経つんですけど、(生き生きと嬉しそうに)お母さんのふるさとで、じいちゃん、ばあちゃんと、僕は結婚したのでEちゃんと4人で、毎日楽しく鳴門金時を作って農業をしています。

僕は今26歳で、じいちゃん、ばあちゃんは70歳を過ぎているんですが、本当に僕のことを大事にしてくれて、今楽しく農業できているのも、今こうして熱い思いを話をさせてもらっているんですが、こうして話をさせてもらえるのも、じいちゃん、ばあちゃんのおかげやなあと、本当に、家族みんなのおかげやなあと、思います。

今まで、じいちゃん、ばあちゃんはこんな会に来てくれたことはなかったんですが、今日話しているようなことも、じいちゃん、ばあちゃんをあまり悩ましたらいかんと思って、こんな思いはあまり深くは言えなかったし、やっぱり、価値観の違いもあるのでなかなか話がまとまらなくて、差別の話になると最初は意見が合わなくて、お互いに言いたいことを言って終わりでした。

今日も、ここに来るまで一緒に畑仕事をしていたんですが、お互いいろいろなことはありますが、最近、畑をしながらも人権のことについて笑顔で話ができるというか、思いを語り合いながらおもいを作っています。若い者と一緒にいるというのは、考え方も違うのでごついエネルギーを使うと思うんですが、今日、ここに一緒に来て僕の話聞いてくれているのが本当にうれしいです。感謝しています。口下手で、あまり上手く言えないんですが、人権について勉強したいと思っています。今日はよろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

今日の、フォーラムの資料に3年間の営みが凝縮された、彼らが卒業して行った時の卒業式の「答辞」が印刷されています。今日、今からしゃべってもらおうC君が生徒会の会長であり、この「答辞」を卒業式で読んだわけです。差別があるということは、本当に切ないです。悔しいです。でも、それを本当に克服してける集団、取り組んでいく集団は本当に命輝くと実感します。これが人権教育の可能性だと思うんです。

差別電話を受けて、生活ノートに綴ってきた。その時のD君の担任が「先生、これ読んで。」と持ってきた。あの時の差別に対する悔しさというのは忘れることはない。でも、そういうものをきちんと乗り越えて学び合う集団というのは、やっぱり輝いています。そういう、「人権教育のよろこび」というものを、私たち

は大事にしたいと思います。

さあ、ではC君いきましようか。(ニコニコしながら)拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト C》

こんにちは。(会場より「こんにちは」)紹介に預かりましたCです。さっき、Dが話をしてくれたんですけど、(語りたい思いを整理しながら)結構、いっぱいいっぱいなんですけど、一生懸命話をさせてもらいます。

ここは、鳴門市の「地場産業センター」ですが、僕は、校区は違うんですが、高校の時、鳴門の高校に行っていて鳴門市に就職しました。新入社員の研修に、この「地場産業センター」に来て、この場所でいろいろな話を聞きました。

ある会で、「人権フォーラム」に参加して、その時は、Dとか他の仲間と見る方の側だったんですが…。(言葉を捜しながら)その時にフロアからしゃべりました。

……今日もこうしてここに立っていますが、言えるような人間じゃないので、「小さい人間が言いよる」と思って聞いてください。

さっきDが話してくれた、中学校の時に経験したことは僕も衝撃であって、本当にリアルな話で震えたり、今も、正直言って話を聞いていて震えます。この電話のことはだいぶ前なんですけど、今も実際にあると思います。あるからこそ、ここでこうして研修しているのだと思うし、まあ、これはちょっとおいておきます。

Dが差別の経験を受けて、僕も地区出身ですが、地区出身ということはどうってことはないんですよ。たまたまそこに生まれているだけのことなんですけど、そこに生まれたことで、正直言ってこういう差別を受けているので、何でも言える友だちや仲間の中ではないんですが、僕が1人になった時に心細くなって。

僕も地区出身なんですけど、今日、それがなんか言いにくいのは、今日は職場の同僚が来てくれて、聞いてくれていると思うんです。職場では「俺、地区出身だから」と言う必要もないし。でも、…「何かあっても差別されるのが怖い」とか思っている人もおると思うんですが、いまさら立場宣言っていうのもなんですけど、今日は、僕の「立場宣言」でもあるんです。

多分、今聞いてくれている同僚は、「関係ないですよ」と思ってくれると思うし、関係ないことではないんですが、今日、ここで話をするからと言ったら来てくれました。それはすごくうれしいし、その来てくれた同僚のためにちょっと時間がもらいたいなと思います。

工場に就職していて、(壇上の机に用意されたペットボトルの水を持ち上げながら)今日も、僕の働いている工場生産している水を、こうして皆さんのところにも出していただいて、(笑い)感謝しています。こうして働いている工場の中の現場で、差別落書きと遭遇してしまっって、Dの電話の時と同じくらい衝撃で、リアルで、それを見た瞬間、「わあ、来た」と思って、その時には自分では、「負けてたまるか」的な気持ちでいたんです。

その、差別落書きを書いた人もわかっていたし、「もう、こういうの書くのやめにせんかな」と、その人には言ったんですけど、一旦そういうことがあったら上手く付き合えないと言うか…。

何年か前の話なんですけど、今でもどこかにつかえながら、どこかに行こうと誘う時も、なんか、その人だけ避けているとか、これはちょっと辛いんですが、今日も同僚も来てくれているし普通に仕事はしているんですが、同じ職場の中でそういう差別があるということ、まずわかって欲しいと思います。

普段は、みんなで仲良く仕事をしているつもりでおるんですが、その裏では、やっぱり何かムシャクシャするようなものがあって、でも、それを隠しながらいかなければならないところがあって、職場というのは、自分が食べていけないかんところだから、やっぱり気分よく仕事をしたいし。

自分が地区出身ということ言っても、どうってことはないんですけど、「あいつ地区出身なんやて」とか、「ああ、それだからだなあ」とか、その、「それだからだな」ということがよくわからないんですが、そ

ういうことを言われたら、居り辛くなるし、それが怖いんです。職を失いたくないし。家族も食わせていかないかんし。1歩踏み出すことに気おくれする時があって、今日は、職場のメンバーに「鳴門の地場産業センターで、こういう会があるから」とは言っていたんですが、なかなか「同和問題」ということが言えなかったんです。

「Cさん、何の話をするんですか？」と聞かれても、自分が話をするということは言えても、「人権の話」としか言えない。どこかで自分がふたをしてしまう。職場の仲間に「来てくれよ」と言っただけなんですが、今日来てくれて、自分が会社で1人で悩んでいたことが、これからはしんどくなった時に、こいつにだけは言えるかなと思うんです。

1人に言うまでは、すごく勇気が要るんですよ。同和問題だけでなく、いじめにしてもそうだと思うんですが。いじめにあった時というのは親にも言えないと言いますね。1人にだけでも言えたら、それでOKだと思うし。

小学生の6年の時の、差別電話がかかってきた時にも、Dが1本電話をくれたし、共感できて、今もこうしてつながりがあります。僕も、職場で差別落書きを見た時にDに電話をしたし、同じように衝撃を受けてくれたし、差別電話の時、僕がDに言ったのと同じくらいに僕を励ましてくれた。この関係というのは、自信を持って「いいよ」と言えるし誇り高いものです。

今日、ここに同僚が来てくれて、会社で、もしこういう話になった時に、こいつにだけしか言えんかもわからんけど、「1人に言えた」ということが、ものすごく楽になりそうだし…。

こいつが、今日来てどう思っているかはわからんけど、(笑い)まあ、気を使って「良かったですよ」と言ってくれると思うんですが、(笑い)会社に帰ってから、会って「僕は差別をしてしまった」と言ってくれても全然平気で、でも、「なぜ差別するのか」とか正直に言ってくれたことに対しては、僕も正直に言うし、絶対お互いに喧嘩なんかならないと思います。

そんな風に、正直に話がしていけたら会社も多分明るくなると思うし、人間関係も、僕らつながって、こんな輪を広げていけたらと思うんです。今のことは、こいつと僕の2人だけの話になったかもしれんですけど、「1人だけでもつながろうとする勇気」というのを持って欲しいなということも伝えたいなと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(ニコニコと)ひと言ひと言の言葉が人をつないでいきます。そういう、人をつなぐ言葉を大事にしていく学びを、日常の中で大切にしていきたいと思います。

中学1年の時から私はずっと見てきましたが、語り口調は、中学1年の時から同じですね。(笑い)じゃあ、B先生お願いします。拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト B》

失礼します。私のように、歩みの遅い人間もいるということでお聞きいただけたらと思います。

私は、この前にいる3人と同じ、板野中学校にいました。ちょうど10年余り前のことです。D君とC君、2人ともとってもかっこ良かったです。大人の私が見ても、すごく魅力的な中学生でした。1年・2年・3年と、共に輝き続けた人たちで、この子たちの年代には、そういう子どもたちがたくさんいました。

私が板野中学校に赴任して3年目でした。A先生と同じ学年になって、私が初めて自分が教育というもの、人権というものについて、じっくりと考え出した時だったと思います。私の原点になった年が、この、1994年～1996年であり、人権というものについてじっくりと考えてこられたと思っています。

(思いをまとめるように言葉を止めながら考え、テレたような笑顔の中で言葉を続ける。会場係がマイク

を持ってきて、パネリストのものと交換する)私の原点が、板野中学校のこの子たちとの出会いであり、A先生との出会いでした。A先生は、今と同じように貫禄がありまして、久しぶりにA先生の語り口調を聞いて、私も胸の中にメラメラと燃えるものがありました。

私は、自分のことを語れるという振りかぶるものがないのですが、板野中学校で育んできたものは、今でも私の宝物です。この会場にもその時に一緒に頑張った同僚がいますし、A先生だけでなく、同じ学年の先生方は、一緒になってこの子たちと向き合って、本当に自分のこと、この子たちのことを真剣に考えました。

A先生とは、職員室で隣の席が3年間続きました。疑問があったり、「私はこう思う」ということがあると、すぐA先生に思いをぶつくと、真剣に返してくれました。泣きながら話をするのもいっぱいありましたが、いつも、熱い仲間たち、子ども達に囲まれて過ごした3年間でした。

それから、私は、この横にいる3人の人たちと別れて、違う中学校に赴任することになりましたが、それからの私は、いつもその中で、この子たちそれから同僚たちと同じように歩めているか。それを常に問い直しながらやってきました。中学校が変わると、先生方の様子、子どもたちの様子もみんな変わってきます。自分の中の燃えているものが揺らぐんですね。

いろんな子ども達、保護者、それから先生たちに出会って、「自分の中にあるものが本物だったのか」と、いつも問い直す日々が続きました。久しぶりに、C君とD君の話を聞きながら、私は、本当に心の中にこういう熱いものを持って人権学習に取り組んでいるかと、いろいろ思い起こしていました。これからもこの仕事なので、いろんな人たちと出会うと思います。いろんな人たちの思い、そういうものに触れながら、自分の中にあるものをやっぱり問い直し続けながら、これからもたくさんの人とつながって生きていきたいと思っています。

(間…)ええ、皆さんもそうだったと思いますが、人と話をすると、話をして初めて自分の中の意識が見えてくることってありませんか？私は、自分の中でいろんな思いはいつもたくさん持っていました。話してみるとそうでもなかったり、もっと深いものが出てきたりします。そういう物を味わわせてくれたのが板野中学校でした。

自分の思いをぶつける。いろんな人の思いを聞く。そのことで、自分の中にはどんな膿があるのかがよく見えてきました。それは大事にしていきたいなと思います。

2人の話に対して、私の話はあまりにも具体性がないと思われるかもしれませんが、今、私も歩んでいるし、この2人も歩き続けています。決して立ち止まらないように、本当に、「いつも自分は輝いているか」ということを問い直しながら、毎日歩き続けていけたらなと思っています。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

いろんな思いがあふれてきます。おじいちゃんとおばあちゃんがこの場に来てくれた、そのことをD君が話してくれました。おじいちゃん、おばあちゃんと、奥さんのEちゃんも来てくれています。私はやっぱり、同和問題が、人権の問題が、また、生き方の問題が、生き生きと語れる家族のつながりってすごいと思うんですね。

農業大学で出会ったEちゃんのお父ちゃん、お母ちゃんがD君をすごく大事にしてくれる。その、すごく自分を大事にしてくれるEちゃんの両親に、自分が同和地区出身だということを告げたら、この良い関係が崩れるんじゃないかと思って、なかなか言えなかったんです。(Dさんに確かめながら)とうとう言わなかったかな？結婚するまで言えなかったんだっただけかな？(Dさんはコーディネーターを見上げながらうなづく)

そういう話を彼がする中で、今日も、この会場に、四国中央市の川之江の方が来てくれているんですが、川之江の隣保館の研修に一緒に行ってもらったことがあるんです。その時、Eちゃんがフロアからしゃべってくれたんです。「Dさんが、自分が同和地区出身だということをすごく心配している。気にしている。そ

のことを言いたいけど、なかなか言えん。」結婚の前に、EちゃんがD君の思いを両親に告げるわけですね。その時に、Eちゃんのお父ちゃん、お母ちゃんから返って来た言葉を語ってくれたんです。

「まだ、そういうことにこだわって差別する人がおるかもわからん。でも、それは間違っているのだから何も恐れることはない。もし、身内で、親戚で、何か言う人がおったら、お父さんとお母さんがちゃんと話をする。これからは、Dさんとの生活が長いんだから、Dさんと幸せな家庭を作って欲しい。」

そんな話を両親が話してくれましたということ、フロアから彼女は語ってくれたんです。私は、やっぱり、「すごいこと」だと思ってしまうんです。現実には、いろいろなものに囚われて生きている世界ってありますよ。でも、きちっと人間を見て、本質を見て、間違いをきちっと正していく人生というのはすごいです。

(笑顔で、Dさんに向かって)Eちゃんがおって、おじいちゃん、おばあちゃんもおって、いっぱい言いたいことがあるわな。もう泣くのは無しでな。(会場の空気が和み、笑いがおこる)

《パネリスト D》

あ、すみません。Dです。結婚した時のこととか、A先生が言うてくれたんやけど、やっぱり、自分のことって、結婚するまで僕は言えませんでした。付き合っていることをあいさつに行ってから、すごく両親が歓待してくれ大事にしてくれるんやけど、僕が自分の地区のことを言ったら、本当にこの関係が無くなることを恐れました。

結婚して1年くらい、もっと経つのかな…、お母さんには自分の思いが言えたんやけど、お父さんにはまだ自分の思いは言えていません。

そうは言っても、今もこうして毎日生活していて、まだまだ自分の中に「自分がこだわっているから、差別ってあるのかな」とか、いろいろ考えてしまうんですが、「こだわっているから」とか「こういう会をするから差別がなくなるのでは」とか、考え方はいろいろあると思うんです。

僕が地区出身だと知ったのは、小学校の時だったんですけど、その時、すでに僕はショックを受けたんです。その時に、「人間のドロドロした意識というのがあったからそう思ったんじゃないかな」とか考えたりします。

今も現実には、差別はあると僕は思っています。差別は人間関係の中で生まれてくると思うけん、僕は、やっぱり、じいちゃん、ばあちゃんの話が出てくるんやけど、じいちゃん、ばあちゃんと、もっといい関係、考え方は違うてもわかろうとする努力のできる関係を作っていきたいと思うんです。この場でも、分かり合おうとする空間、もっとお互いのことを安心してものの言える空間というのを広げていきたいです。こんな差別のせいで、せつかく両親が産んでくれたこの人生を台無しにしたくないです。

僕だけでなく、本当は、差別があるから地区・地区外関係なしにみんながしんどい思いをしていると思ったので、やっぱり、「差別は無くなる」「差別は無くならない」といろんな思いがあるんですけど、できるだけ、無くしていこうというか、思いの語れる空間をせめて僕は作りたいです。

僕は、板野中学校の3年間で、自分のことをできる範囲で仲間と見つめ合って、その後、農業系の高校に行ったんですが、正直、板野中学校から1人で農業系の高校に行って、高校に行く時には、「僕は1人で行って高校を変えてやるんだ。学校に全体学習みたいな空間を作るんだ」というふうに意気込んで行ったんですが、実際の高校・大学の5年間は、自分のことを、隠して隠してコソコソコソ送ってしまいました。

学校生活の中で、平気で人を茶化したりとか、平気で人の悪口を言うたり、そういう空間の中で、多分、自分が差別を受けることを恐れたんだと思います。だから言えなかったんだと思います。

僕は今、うちで農業をしているんですが、隠してしまいそうになる自分がたまに見えてくる時があるんです。例えば、「D君、板野のどこに住んでいるの？」と聞いてくる人もおるし、それが意識を持って言っているのかは僕にはわからないし、そこまで深く考えたら心も切ないし、そういう中で、自分の思いを偽って

生きるというか、自分を隠しながら生きるということは、やっぱり、自分を認めずにコソコソと生きた高校・大学の5年間と変わらないと思うし、こういう生き方というのはできたら僕はもうしたくないです。

よくはわからんですが、いろいろ思う人もおると思うけど、僕は、こういう差別のこともふまえたうえで、堂々と、生き生き楽しく考えられる自分でありたいなと思いながら農業を毎日頑張っています。(拍手)

《コーディネーター A》

(Cさんに笑顔を送りながら、)C君、いきましようか。はい。どうぞ。笑いを取ってね。(会場に笑いがこぼれる)

《パネリスト C》

笑い…難しいものがあるんですが、できたら2～3取りたいと思います。(笑い)さっき、Dの結婚の時の状況とかをA先生が紹介してくれて、Dも話してくれたんですけど、僕も結婚していて、その結婚の時に、「どう差別をするんだろうな」ということを想像していました。

僕の結婚した人は、高校の時に会った人なんですけど、同じ「人権サークル『ねがい』」という、社会問題研究部のような部活動に入っていました。お互い、同和問題については、部活動を通してよく話をしていました。

今日は、中学生とかがたくさんおって、若い時には恋愛とかよくすると思うんですが、「あの子カッコよかってなあ」とか、「あの子好きだ」というのが恋愛なわけなんだけど、でも、結婚となったら、そのレベルじゃなくて、もう一步踏み込んだところの話だと思うんです。今、恋愛しよる子は大事にして欲しいと思うんですが、僕は高校の時に、その出会った女性と同和問題の研修で話をしていた時に、部室に「部落の歴史」とか同和問題に関する難しい本が並んでいるんですが、結婚差別を扱った本があって、お互い好き同士だったので、僕は結婚する気でおったし、「結婚差別ってどんなんだろうな」と思ってその本を見た時に、僕らが「よし、結婚しよう」って思うような内容ばかりではありませんでした。

お互いの中では差別はないんやけど、自分の親、じいちゃんやばあちゃん、あるいは、例えば親戚の人、例えば友人とかが差別をする。「あの方は同和地区の人やけ、やめとけよ。」まあ、何を思って言っているのかわからんですが、こういう話などが書いてあって、「結婚しないで別れてしまいました。」とか。後、「私の友だちは、そういう経験をして自殺してしまいました。」とか。命なくすのは絶対なしだしね。これはもう、何をしても一緒だと思うし、いじめとかでも、自殺に追い込まれて死んでしまう子もおるけど、僕は、絶対これは無しだと思うし、何がそうさせているのかというのは、すごく考えて欲しいところなんです。

やっぱり、同和問題に関したら、間違った知識とかいうことが変に広がっていて、笑い話で済まされるようなことが、僕らにとったら深刻な問題で、そういうことで苦しい思いをする人というのはすごく多くて、僕らもそのまま結婚というところまでなって、その結婚をする時に、自分が同和地区出身であるということを、言おうかどうかというところになると、自分からストレートに言うことには、なかなか踏み切れないところがあって…。

彼女の親に、僕が同和地区出身であるということを、遠まわしに話をしておいてもらったというか…。その時に、僕のケースは、「関係ないよ」と言ってくれたんですけど、「関係ないよ」と言われるということは、僕が地区出身であるということを認めてくれた上で、結婚をさせてくれるということに関しては、彼女の親に感謝し、「ヤッターッ！」っていう気持ちだったんですが、実は関係なくはないんですよ。結婚することによって、「あそこの人は地区の人と結婚したそうだ。」「かわいそうだな。」何がかわいそうなのかはよくわからないんですが、こういうことを言われたりすると聞いたこともありますし。

結婚するというのはどういうことなのか。やっぱり、自分だけの問題じゃなくて、親にも祝福してもら

いたいし、周りからも祝福してもらいたいけん、いろんな人に認めてもらいたいというのがあるんですが、関係なくはないですね。さっきも言うたけど、「あその人は地区の人と結婚したんやて」となった時に、正直、そういうことを言われるのは辛いですよ。正直言って苦痛だし、陰で言われるのも嫌だし、そんな間違っ意識が広がっても。その、間違っことを言っている人と闘っていく力というのをつけておかなければならないし。

結婚する僕にしても、その女性にしても、「関係ない」と言ってくれた、女性のお母さんにしても、やっぱり、「間違いだ」と言えるくらいの知識を持っておかんと、陰で差別をされて、それが自分に向いてきた時につぶれてしまってもこれはよくないしね。

同和問題にしても、中学生の子もいるし、これから結婚という人もいるかもわからんし、また、自分の子どもが、孫が、結婚をというように、いろんなジャンルの人が来てくれていて、すごく言い易いんですけど、もし、自分が「じいちゃんばあちゃん、地区の人と結婚するんよ」とか、「地区外の人と結婚するんよ」となった時に、「みんな、どうするんだらうな」と思ったりするんです。

ここに来てくれた人は、いろんな話を聞いて、「差別はいけない」とわかっているから、「俺はいける」と思った人もいるかもわからんけど、このケースというのは、絶対その場にならんとわからんと思っていたんです。

これは、同和問題だけでなしに、障害者問題であったり、いろんなあらゆる差別の問題があるんですけど、同和問題以外になったら、僕も差別をしてしまう側にまわってしまうかもしれないわけだし、その時、自分はどうするんだらうなと考えた時に、自分の「子どものこと」というのはものすごく大事なんです。

Dの話にもあったんですけど、結構、本音で話をしてしまうかもわからんけど、(Cさんは、言葉を中断し、笑顔でDさんと何やら相談を始める。その姿がほのぼのとした雰囲気を作り、会場に笑顔があふれる)違うケースになった時に、自分も子どもがおるし、子どもが大事やけん、「何にも苦労せんように、これからも生きていって欲しい」って思うんです。

(思いがあふれて、言葉に詰まりながら)でも、「反対していい生き方をするんだらうな」という、勝手な思い込みで反対しているのが親心ではなくて、「この人と一緒におりたい」と思う気持ちというのを、自分は1歩ひいて、「この子が生きていくんだ」と思って、子どものことを認めてやるのが親心だと思うんです。

認められた人というのは、ごつい幸せになっているはず。Dは、今、ごつい幸せに見える。Dの、じいちゃん、ばあちゃんが来てくれて、僕もごついうれしいし、(ニコニコしながら)今日、Dがごつい自慢げに言うんですね。(笑い)僕は「うらやましいなあ」と思うし、僕も、じいちゃん、ばあちゃんのことを言いたいと思うしね。Dはカッコいいですよ。(会場が笑顔で包まれ、拍手が起こる)

《コーディネーター A》

この後、皆さんのいろんな思いを語っていただく時間になるんですけど、自分が好きになっていく。「私っていいなあ」って思える。そんな自分を作っていく。価値観が変わるんです。「自分の家族って本当にいいなあ」と思えることです。

私が板野中学校へ行って、板野の子どもたちと出会うまで、C君が、「なかなか職場で言えん」という話をしましたが、同じですよ。教師をしながらやっぱり言えないんですよ。

私は地区出身です。でも、知っている人がいてくれたらそれはスツと言えるけど、知らない人の中で、「その中に地区の人間はおらん」という話しをされたら、なかなか言えんのですよ。現実には、やっぱり差別があるという場に直面します。20代後半の頃の、自分のことを言えなかった頃の私が、家庭訪問に行くじゃないですか。結構口が立ちますからね、よろこんでくれるんです。「先生が担任になってくれて嬉しい」って。まあね、それはヨイショもありますよ。でもよろこんでくれるんです。

そして、こう言われるんです。「先生は、さぞ、ご立派なご家庭にお育ちになられて、さぞ、ご立派な教育を受けられて、さぞ、ご立派なご両親に育てられて」と言われた時に、「来たわ。来たわ。」と思うわけですね。次の瞬間、「お住まいはどちらでしょうか。」と問われた時に、「〇〇町の〇〇」と私がふるさとを言った瞬間ですね、「うちの孫は先生のような人に担任を持ってもらえて本当にうれしい。」と涙が溢れとったのに、私がふるさとを言った瞬間涙がスッとひいていくんです。

私は全然変わっていません。でも、私がふるさとを言った瞬間、涙がひいていく。「これが差別か。」と思うんです。今だったら、私はそのおばあちゃんを愛しますよ。おばあちゃんといっぱい話をしますよ。でも、20代の私は、「これなんか」と、ズシッと疲れを感じていくだけの家庭訪問だったんです。それが、板野中学校の子どもたちと出会う、先生たちとつながる、そういう中で、私自身が解放されるんです。B先生がそうだったんです。B先生、いきましょうか。

《パネリスト B》

そうです。私自身もそうだったんです。この、鳴門の人権フォーラムの『ひとごと』から『わがことへ』というテーマそのものでした。私は、「なあんだそんなことで悩んでいたのか」と言われるようなことを、ずっとひた隠しに隠していました。

今から思うと、「何が自分をそうさせていたのかな」と思うんですが、私は父のことが全然語れませんでした。全然しゃべれませんでした。「なんだ。何でそんなことが言えなかったんだ」と、皆さん、多分思われると思います。

なぜ、父のことが語れなかったかということ、私の父は農業をしていました。農業をしていたということが言えなかったんですね。ずっとごまかしていました。「Bさん、お父さんは何をされているの?」「…うん」と答えただけで、はっきり答えたことはずっとありませんでした。先生という仕事についてからもそうでした。それが、人権問題とつながっているということがわかったのが、板野中学校に来てからでした。

ですから、つい最近まで私は自分の中で父親を差別していました。大好きな父親なのに父親のことをしゃべれない。なぜかということ、父親はいつも泥にまみれていました。友だちのお父さんというのは、会社から、革靴を履いていてかっこいいかばんを持って家に帰ってくると、とても楽しそうに話をする。そういう家庭でした。

私の父は、帰ってくるとドロドロに汚れて、小さい頃から、私の起きる前から仕事をしていて、寝る頃にはまだ帰っていなかったり、仕事ばかりをしていました。そういうふうにして私を育ててくれたんですが、父の仕事が語れませんでした。父のことを語るのに、すごく涙が出て、なかなか語れなかったんですが、それが、「人権問題と深く関わっている自分の中の人権問題」とであると気づかされたのが、板野中学校の全体学習でした。

みんなが熱い思いを語る中で、「私はいったい何を見てきたんだ」ということを思い知らされました。「人と人とがつながっていく」という中で、自分の心の中に閉ざしていたものが、本当に、解き放たれる瞬間でした。しばらくは、父のことを語るのにやっぱり涙が出ました。A先生に、「その涙は何ですか?」とよく聞かれました。なにかこう、だめだった自分から、少し高いところへ変わろうとする、自分の殻を脱ごうとすると涙が出ました。そういうことを心のままを語れるようになったのは、この隣にいるような子ども達との出会いがあったからです。人とつながっていく中で、自分の中に力が沸いてくる。そんな出会いをさせてもらいました。

この2人の、素晴らしい魅力的なところはどこから来ているかということ、やっぱり、人とつながっていく力がすごく大きいと思います。今聞いていただいてわかると思うんですが、D君が、おじいちゃんおばあちゃんや、お父さんやお母さんのことを語る中で、一生懸命に家族を大切にしている姿が伝わると思います。C

君のおうちの人も、彼がこうして人の前でも話ができるというのは、家族のものすごい支えがあって、この人たちが歩めているんだと思います。本当に素晴らしい人たちです。こういうことがあって、この素晴らしい2人が歩めているんだと思います。

もちろん、この2人の中で育てていたものもあると思いますが、その土壌になっているのは、家族の方たちの温かい一言一言、まなざしというようなものがあつたからこそ、2人が前を向いて歩いていけているんだと思います。私も、今でも喧嘩ばかりしていますが、家族のことを大切に思って、家族の絆というのを大事にしていきたいなと思っています。(拍手)

前半完了

=意見交換=

《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。私は、昨年度から北島中学校でお世話になっています。板野中学校での営みが、北島中学校の子ども達の中にも広がっていきます。語り語りを生んでいきます。1人の思いがまた仲間の思いを引き出していきます。「人間てええなあ」と思います。「人間てすごいなあ」と思います。

そんな中で、今年度の板野郡の人権問題の意見発表の大会で、「語り合い」の学習、これは全体学習を取り入れたものなのですが、「語り合いの学習でつかんだもの」という意見発表を生徒がしてくれました。これはもう、非常に長い発表だったものですから、それを短くして県に出してもらっています。北島中学校の子どもたちが、前の席に座ってくれていますので、営々とつながっている人権教育・同和教育のよろこびの1つとして、北島中学校の子ども達の発表を聞いてくれたらうれしいなと思います。

(壇上から下へ降り、笑顔いっぱい、フロアの方を向くように促し、女子中学生に自分の持っていたマイクを手渡ししながら)いきましょうか。じゃあ、拍手してやってください。はい。

《フロア N》

(発表原稿を持ちながら、はっきりとした口調で原稿を読み始める)

私は、学年全体の仲間としたいや願いを語り合う人権学習によって、「生きること」に対する考えががらりと変わりました。中学2年の初めに、「語り合い」という全く新しい人権学習に出会いました。「語り合い」の学習というのは、自分の思いや願いを語り合う学習です。しかも、学年全体の仲間と、みんなが一つになって、その本心を語り合っていくものです。

友だちみんなは、「そんなこと、できっこない。」と、この学習にあまり乗り気ではありませんでした。私も、「どうせみんなきれいな事を並べて終わるんだろうな。」と甘く考えていました。予想通り、最初の「語り合い」では、みんな素直に意見を発表しようとしていませんでした。

ところが、何度かこの学習をしていくうちに、1人、また1人と自分自身のことを打ち明ける人ができました。私は「自分の辛いことを打ち明けられるなんて、強いな。私とは全然違う。」と感じ、発表をより真剣に聞くようになりました。

周りを見ると、私だけでなく、学年のみんなも真剣なまなざしでその発表を聞いていました。そして、私自身は発表者の一生懸命さに心打たれ、その人の傷みや苦しみをより理解したいと思うようになっていました。それからというもの、私の中の「語り合い」への意識がどんどん変化していきました。

中学2年の3学期、『学校』という映画を学年全体で鑑賞しました。この映画で、「夜間中学校」という世界を私は初めて知りました。そこには、それぞれ生まれた環境が違う人たちが、自分を取り戻すために必死に学ぶ姿が描かれていました。

登場人物の人生には、様々な人間模様があり、私は何とも言えない気持ちになりました。特に、在日韓国

人のお母さん・オモニが必死に学び、必死に生きる姿を通して、私は幼い頃に亡くなった祖父のことを思い出しました。

私の祖父は韓国人です。私は鑑賞後の感想で、初めて、その祖父のことを書きました。「今こそ、このことを真剣に考える時がきた。」と素直に思いました。そして、祖父のことを綴ることで私の意識は大きく変わりました。

映画を通して、祖父も映画のオモニのように、祖母と共に、精一杯、自分の人生を生きたのではないかと思いました。そして、日本で商売をしたり、祖母との結婚にまつわる苦労や、そこにあった差別を思うととても憤りをおぼえました。

2年生の最後の「語り合い」の学習の前、先生に祖父のことを発表してみないかと言われました。私はとまどいました。実際みんなに祖父のことを話すとなると、やはり反応が気になってしまいます。びっくりされたらどうしよう。これが一番の心配でした。発表をどうしようかと悩んでいた時、「語り合い」で真剣に仲間の発表を聞いているみんなの顔を思い出しました。「こんなに心配をする必要はないのかもしれない。怖がっていたら何もできない。」という気持ちになりました。

そして、家族にも発表するかしないかを相談してみました。両親は、「昔はそのことで差別を受けたらしいけれど、それは本当に間違っていること。今は、韓国との国際理解も深まっている。堂々と生きてきたおじいちゃん、おばあちゃんに誇りをもって発表すればいい。」と言ってくれました。

私は、自分の中の確信がさらに大きくなったような気がしました。こうして、家族にも背中を押してもらい、私は自分の今の思いを発表することにしました。発表の時はとても緊張し、言葉がとぎれることもありましたが、みんなの真剣なまなざしが大きな勇気を私にくれました。一つひとつの思いや願いを噛みしめるように、みんなに私の胸の内を伝えていきました。そして、それに温かく応えてくれるみんな。発表した後、とても心が軽くなり「発表して良かった。」と心の底から思いました。

私たちの本当の思いや願い、そこにある悲しみや切なさ、そんな心の内を語るには、聞いてくれる人との関係が重要です。そんな仲間がいるから、私はみんなに自分を語ることができました。さらに、心を開いて語り合うことで私は変わることができました。私は、北島中学校の3年生が大好きです。一緒にいて楽しいだけでなく、とてもエネルギーがあります。「語り合い」を通してみんなが少しずつ変わり、成長したと思います。みんながみんなを大切にしています。そんなみんなを私も大切にしたいと思っています。

そして、一人一人の思いや願いを安心して語り合っていくことができる関係を、これからもみんなと作り続けたいです。私は、「語り合い」の学習でつかんだ生きるよろこびを支えとして、自分を信じみんなを信じ、これからも強く生きていきます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(精一杯、生き生きと発表した中学生に温かい笑顔を返しながら)あふれる思いがあります。自分の言葉で語るんです。みなさん、安心して自分のことが言える職場の空気を作るんです。地域社会の関係を作るんです。身近な人間関係の中に、差別やいじめがおこるんです。そういうものをきちっと正していける、おかしいことはおかしいと言える、間違っていることが間違っていると言える。「どうでしょうか」と素直に問いかけられる。そして、自分の気持ちが出せる。自分を表現することを通して、自分が解放されていく。そんな学びの中で、正に人権問題というのは「わがこと」になっていくと思うんですね。

生い立ちが違います。おかれとる状況も違います。なかなか人の痛みはわかりません。わからんということがわからなかったら、やっぱり、残酷な状況が起こります。「学び合う」、「知る」という作業です。今日、会場いっぱいの方が集まっていただきました。中学生から様々な年代の人が集まっておられます。いろんな価値観と出会いながら、「生きる」ということを深く認識する、これからの時間になればと思います。

今の発表、また3人のパネラーの思いに、会場みなさんの、思いや願いを返していただけたらうれしいなと思います。いろんな思いを出し合いながらいきたいなと思います。…どうでしょうか。(一呼吸おいて、会場前の席よりスッと手が挙がる)はい。すみません。マイクよろしいでしょうか。

《フロア S》

失礼します。鳥取県の倉吉から来ました。この「人権地域フォーラム」に参加するようになって3年目になります。私は同和教育と出会って、こういう場に本当にたくさんの学びをさせていただいて、自分の生き方がすごく変わって楽になったなあ。こんないいものはないよなということ 생각합니다。それはやはり、自分の中に、本当にいろんな思いに直に触れて、それを積み上げていくことができたからだろうと思います。そこから自分が変わったなということ 생각합니다。

以前の私は、違う価値観の人は、自分の意識の中から排除していました。近づこうともしませんでした。語り合おうなんて全く思いませんでした。自分と本当に心の通い合う人間関係しか作ることができませんでした。

でも、この学習と出会って、いろんな学びをして、いろんな思いに触れてきた中で、いろんな人と出会いたいなあ、いろんな人と語り合いたいなあと思うことができました。そういう中で、私は大きな出会いをしました。その同和地区に住んでいた親友達との出会いの中で、人の生き方って何だろうかな。本当に人間らしい生き方って何だろうかなということ振り返らせてもらいました。人の温かさって何だろうかなということも感じました。

その私の親友の1人が昨年亡くなって、3月に31日に葬儀をしました。その時に、つながりのあった親友の家族から、その葬儀で弔辞を詠んで欲しいと頼まれました。地区外にいて、本当に、地区に住んでいるその親友の親族の中で、知り合いの多くの仲間の中で、私の思いを弔辞として述べました。

いろいろな人間関係の中で、「人権教育」「部落解放」とか、その具体的な言葉は出せませんでした。でも、私は、その語る言葉の中に「同和教育」「人権教育」という言葉を抜きにしながら、語るその思いは人権教育そのものの真髄を語りたい。そういう思いで、「生きるということは何だろう」「人の温かさや思いを知ることとはどんなことだろう」「自分を振り返ることとは何だろう」。等々、精いっぱい思いを伝えた時に、後でその村の人たちから、「私たちの言いたいことを全部言ってもらえた。」涙をぼろぼろこぼしながら返していただいた。

その姿を見た時に、つながり合うってこういうことなんだなあ。本当に心触れ合うということはこういうことなんだなあということを感じながら、今もその家族の方や村の人たちと、ずっと継続してつながり合うことができます。

それから、今、地域の中で同和教育推進協議会の会長をしています。先日こんな思いを返してくれる仲間がいました。その人の生まれたところは、私のふるさとのすぐそばにあって、今は同じ地域に暮らしています。私の同級生のお姉さんで、私の子どもの同級生のお母さんでもあります。地区外から地区に嫁いで来て30年以上になります。その中で、自分がふるさとに帰った時に、自分の両親が早く死んだことを、その村の中で、「あんたが同和地区に嫁いで行ったから親が早く死んだんだ」と言われる。

その思いを、本当に切々と語りながら、それでも、「私は子どもを幸せにしたいから、精一杯を一生懸命生きているんだ」と、生き生きと語ります。そして、私たちの今住んでいる地域の中で、差別のなくなることをお願いながら、PTA活動の場でその思いを届けていく時に、今度はその親族から、「あんたはうちの恥をさらす」言われる。

そういう仲間の思いに触れる時に、部落問題は部落の人たちのだけ問題ではなくて、本当にそこに嫁いでいく部落の外の人間にとっても、大きな闘いなんだなあと思います。私は、そういう思いを受け止めた時

に、本当に部落解放って何だろうかな。部落の外の私たちの人間解放があって初めて部落解放があるんだなあということを思います。

部落の人たちが解放されるためには、部落の人たちが頑張るんじゃない。部落の外にいる私たちが、いろんなしごらみから解き放たれて、1人の人を1人の人と認め合え、そのことを本当にお互いが語り合えて、そんな仲間の輪を広げていって、一人一人を認め、そのことを受け止め合える社会を作っていくことが人権教育なんだなと思います。

そういう社会があたりまえとして広がっていくことを願いながら、小さな地域ではありますが、活動を続けています。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

年に1回の本当に貴重な時間です。多くの思いや願いに触れながら、私たちの生活を深く見つめる時間になればと思います。つながり合えたらうれしいなと思います。(間)はい。じゃあお願いします。

《フロア F》

香川県の小豆島から来ました。このフォーラムに参加させていただいて3回目になります。いつも、夏の終わりにもう1回自分を振り返るという機会にさせていただいています。逆に、こういうことを続けておられる、主催されている方をすごいなと思います。

ちょうど、2年前のこの会で出会って、その時にいろいろな話をして、その後、A先生とか前におられる教え子の方々に小豆島の学校に来ていただきました。

その時に、中学生時代の板野中学校でやった話などをしていただいて、我々は、その会でバンバン部落問題を語ろうとか、そこまで入れ込んでいたわけではなかったんですが、「この空気の中だったらしゃべれるな」とか、「この人の前だったらしゃべれるな」と、その時の子どもたちが思ったと思うんですね。それで、僕たちが思っている以上に、その時の子どもたちがいろんなことを語りましたし、ある程度の時間で切りましたから、「もっと言いたかった」と言って、この後、そういう会が何度か続きました。

昨年も、学習会の中で、夜「集い」をして、D君夫妻にも来て頂いたんですが、そのときのいろいろな話の中で、子どもたちに、差別はいけないことはわかっている。でも、なかなか日頃の現実の中で実感することはないけど、「もし、自分がそんな現実にはぶつかったら、例えば、Dさんが後ろにいるんだとか、そういう一緒に考えてくれる仲間がいるんだと思って頑張りたい」こう言った子どもたちが本当にいました。

すごく勉強したからすごいとか、立派なことをしたからすごいとかいうんじゃなくて、前向きに考えている人たちがたくさんいる。何気ない人間関係の中で、家族を大事にしたりとか、仲間を大事にしたりとか、そういうことが、実はすごくかっこいいんだということを伝えていただいて、何かしなければいけないとか、何かすごく頑張らなければいけないとか、すごく肩に力が入っていた。ところが、当たり前のこととして、自分の周りから大事にする。そのことがすごく大事なことで、そのことに対して、地元の住んでいるところからの訴えだけではなく、いろいろなところの人にそんな話をしてもらうことで、子ども達も変わっていくなとすごく実感しました。

実は、この4月に学校が変わりまして、すぐ近くの学校なんですけど、そこでも、子ども達に「いろんな話をしてみようか」という話をした時に、少しずつ少しずつ語ってくれています。こういう取り組みを続けていって、いい関係を作りたいなと思っています。今日は変わった学校の同僚の先生も、「そんな会があるなら、行ってみようか」ということで5人で来ました。ちょっとずつ輪を広げていきたいなと思っています。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

生きる力というのは、つながりをつくっていく力だと思うんです。その職場で出会った。その学校で出会った。その地域で本当にこうつながりあった。その人間関係の中にいっぱい生きるよろこびが生まれてきます。

私は、現在北島中学校にいます。北島中学校の子ども達が大好きです。3年生のみんなが大好きです。板野中学校の子ども達が好きで好きでたまらなかったように、北島中学校の子ども達が大好きです。それは何かというと、子どもの事実に関心されるんです。子どもの姿にいっぱい力をもらいます。教えるということは、とことん教えられることだなということを、毎年毎回の学びの中で実感します。

社会教育の場に、たまたま今夏休みです。中学生が参加しています。こんな場っていいなあと思います。様々な年代の人から、様々な立場の人から、いっぱい思いを聞かせていただけたらうれしいです。いかがでしょうか。はい。どうぞ。

《フロア 男性》

私は、鳴門市の人権教育推進協議会の企業部会の副会長としてお世話になっております。「人権」とか「同和問題」はあまり話をいたしませんけれども、皆さんが、それぞれ今抱えている思いというものを話されるということは、とても素晴らしいことですね。

これは、私たちにとっても、ものすごい力になるんです。みんな頑張っているなということで、別の立場から見ても、非常に思いが伝わってきて参考になっているということで、大変ありがとうございます。おそらく、ここにいる人たちは、もう「わがこと」になっていると思いますので、頑張ってください。

《コーディネーター A》

(ニコニコと)どうもありがとうございました。ここへ来てよかったと、身体全体で感じていく時間にしましょう。多くの意見を通して考えたいと思います。いきましょう。

《フロア K》

失礼します。(フロアの発言者を見て、パネリストのCさんとDさんの顔にいっぱいの笑顔が広がる)実は、前の2人とは見た目は違うんですが、同級生です。(笑い)学校は違うんですけど、C君、D君が前でしゃべっているのを聞いて、僕も一言言いたいなと思って手を挙げました。

2人とは、中学生の時に会いました。さっき話が出ていた、差別電話のあったあの直後だったと思うんですが、徳島県では、今中学生集会というのがあるんですが、その前身になる学習会で、子どもが集まる会です。自分が嫌々出席したところに2人がおって、その電話の話をしていました。すごく遠い問題だったことが、ものすごく近くなって、1回目聞いた時は信じられませんでした。「うそだろう、そんなこと。うちの地域にないし。」というくらいの気持ちで地域に帰って、仲間に中学生集会の報告としてその話をしました。

周りのみんなも信じませんでした。その会に、2回目行った時もその話になって、段々段々自分も怖くなったし、「真剣に考えなければいかん」と思うようになりました。それで、高校生になって逃げていたんですけど、またこの2人と共通の友だちを通じて出会い直すことができ、A先生とも出会い直すことができました。

よく話しをしていく中で、人はどう思うかわからんのですが、「部落差別ってしょうもないな。」「差別ってダサイな。」っていう言葉を、前の2人の内のどちらが言ってくれたかはわかりませんが、その言葉を聞いた時にハッと楽になったんです。本当に、部落差別にこだわるのがしょうもないし、差別することはダ

サイことだと教えられたというか、気づかせてもらったのが前の2人です。

今、臨時教員をしまして、普段から、子どもたちにこのことを伝えていくことが自分の役目だと思うし、また、今日ここに来て、いろんな人とつながったらいいなと思いました。まとまらなかったんですけど、2人が頑張っているのを見てしゃべりたくなりました。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

マイクをつなげてくれたらうれしいなと思います。いかがでしょうか。どうぞ。

《フロア F》

こんにちは。(会場より「こんにちは」)本当に素敵な会に参加させていただきました。鳥取県から来させていただきました。Fと言います。

私も部落に生まれて、部落で子どもを育てて、そしていろんな思いをしてきました。子どもの時はすごい差別をされました。その中で「私なんか結婚できない」と思っていました。そして自分のせいではないのに、ずっと「自分はだめな人間」って思わされていました。

そんな中で、とっても素敵な夫と出会って私たちは結婚しました。そして、かわいい子どもが生まれました。その娘が20歳になりました。娘が子どもの時、「4本指」を出されたりして、「この4本の指ってどんな意味？」って言いました。私は、5本の指ではない、1人前ではない。この「4本の指」のことが語れませんでした。そして、「あのなあ、差別するような人間であってはいけんだけなあ。差別をされた中で、自分がどう生きるかといったら、あんたの友だちを差別するままでいいか？」って語ってきました。そして、毎日毎日、いろんな語りが親子の間で交わされました。

私も、小学校6年生で叔母の家で養女として暮らしていく中で、結婚し3人の子どもに恵まれました。その子どもたちと生きていく中で、いろんなことがありました。そして、自分の生き立ちを、「悲しい人間」「私なんて」と思っていた自分から、「とっても幸せな私」に変わりました。

そして、子どもと共に同和教育を学んで行く中で、「同和教育とは、一人一人のことが見つめられたり、相手の立場に寄り添ったり。なんていい学習だなあ。」と子どもと語り合いました。そんな中で、子どもが差別に出会った時に、「何でそんなことをする。私は、そんな友だちであって欲しくないのに。」そう言いました。子どものその言葉を聞いた時に、「おまえ賢いな。すごいな。」と家族で話し合いました。そして、「でも、友だちはやっぱり差別するような人であって欲しくないなあ。」と語り合いました。

そして、私は「人権教育推進委員」という仕事をいただきまして、そういう立場になりました。いろいろな家族や、子どもと出会いました。

今朝は早く出発するので、4時には起きなければと思っていましたが、昨夜、私の子どもと同級生の子どもから電話があって、「おばさん、会いたいな。」と言ってきました。「どうした？」と聞くと、「僕は彼女ができて苦しんでいる。それで聞いて欲しい。」と言いました。私はすぐ行きました。その子の母親も、いっぱい親戚中から反対されながら、私たちのムラに嫁いできた、とっても素敵な奥さんです。そのお母さんと語る中で、「私は子どもにどういって言いかかわらん。」と言って泣かれました。私が、「何で泣く？ここに来て良かったでしょう？」と問い返すと、「本当に温かいところで、私の生まれたところより大分いい。」と、そのお母さんが言いました。

そして、その男の子に、「おまえ、お母さんの子で良かったか？」と聞いたら、「ここのムラに生まれて良かったと思っている。おばさんとも会えたしなあ」と言ってくれました。その子どもと語る時に、「自分が生まれたことが尊いから。その大事な命を生きているのだから。」「しっかりと自分のことが言える、そんな力をつけようや。そして、女の子の家族に差別するような人であって欲しくないな。そのことを伝えた

いなあ。」と語り合いました。

そして、「私は明日、徳島に行っているいろんなことをまた学んでくるから、帰ったらまた来るから。」と約束をしてここに来ました。私は、今日のこの子どもたちの語る姿を、「何て良いかなあ。すごいなあ。」と思いましたし、「私は、このムラに生まれたから、人の言うことがみんな自分のことのように思える。そして、『じぶんごと』として受けて、そのことをまた伝えられる。」そのことを思いながら、皆さんの話を聞かせていただきました。

私はいろんな子どもや家族と出会います。その時に、「どうして否定的に生きるんだろう。」と思うけれども、やはり、「学びのないところには、夢も希望も生まれないなあ。」と思います。やはり、「学ばなければいけない。人の話を聞こうな。」ということをもっともっとみんなと語り合わなければと感じながら、今日は本当に良い思いをさせていただきました。

今後も地元の子どもたちとつながっていきますので、こういう場に来させたいなあ。そして、「差別ってどんなに醜いか。そして、どんなに自分の心が惨めなのか。そういうことをいっぱい、お土産として持って帰って子どもたちと語り合いたいな。悩む保護者と語り合いたいな。」つくづくそう思いました。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

会場の皆さん。「人権教育のよろこび」というのは、やっぱり、「出会い」と「つながり」だと思うんです。3年前に、最初に発言いただいた鳥取のSさんがパネラーを務めてくれました。それから毎年のように鳥取の皆さんがこの会場においでです。

北島中学校の子ども達の人権作文を紹介したら、北島中学校の子どももこの会に参加するということを話していたら、3学年の生徒が190名おるんですね。その190名の子ども達全員にお土産をいただきました。手作りのお土産です。

北島中学校では、「全校朝読書」ということをしています。その本の中に入れる、それぞれ一人一人にメッセージを書いた、手作りの「しおり」をいただきました。「人間て、何でこんなに温いんだろう。」と思います。そんな温もり、そんな人間のつながりの中に、「生きる力」って沸いてきます。人間として豊かに生きるよろこびを学び合っていくこの学習を、私は大事にしていきたいと思います。多くの人の意見を、会場いっぱい広げていきたいと思います。つながってくれたらうれしいです。いかがでしょうか。

(前から2列目左端の、男子中学生を見つめながら、ニコニコと)よし、いこうか。すみません。マイクを渡してやってください。ゆっくりな。しっかりやれ！

《フロア B》

(ゆっくりしっかりと、発表原稿を読み始める)

僕が2年生の時を振り返って思ったのは、やっぱりA先生が北島中学校へ来てくれたことだと思っています。最初、A先生の話し方がおもしろくて、いつも笑っていました。(笑い)けど、段々話し方にも慣れて、みんなのムードが一気に変わってしまいました。

1学期の頃は、「何でこんなに人権学習が多いんだろう」と思っていた人も周りにいました。けど、最後の総合学習は、みんなが一人一人の発言に集中していきました。僕はA先生が指名してくれたことによって、学年190名の仲間に僕のお母さんのことを話すことができました。

僕は、みんなの方を向いて発表しようとしたら、みんなの視線が僕の方に向いてきました。僕は野球をやっているんですが、野球の試合でバッターボックスに立っている時より緊張しましたが、僕はみんなの視線に向かって発表することができました。

教室での発言、創世ホールの最後の総合学習の発言と、クラスの仲間や学年全体の仲間に、僕の心の中にじっと閉じ込めてきたお母さんのことを発表することができて、僕自身の生きる方向が見えてきたと思います。みんなの前で堂々と誇りをもって、語れた自分に誇りを持って頑張っていこうと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

私たちは、いろんな状況の中で生きています。命輝く人生を生き抜くために、豊かな人間関係を創る。そういう関係を創る学びだと思います。限られた時間です。いっぱいつながってくれたらうれしいなと思います。はい。いきましょ。

《フロア 中学生》

今日、家族が好きとか、家族のことをすごく好きだと思っている人がうらやましくって、私は、住んでいるところが同和地区なんやけど、私のお母さんが本当のお母さんじゃなくて、今の新しいお母さんは20歳なんですよ。周りの人の目とかがすごくて、私のお母さんが部落とかをすごく気にする人で、私が、こういうところとか、中学生集会に行つて来ると言う、ごつい心配したり、「あんたが部落ってことを言われんよ。」って言われるんですよ。

でも、そんなこと関係ないと思って、「立場宣言」とか、「する」とか「せん」とか、どっちでもいいと思うんですよ。でも、「立場宣言をしようかな」と思っても、言えたことがなくて。いくら学年とかがいい雰囲気でも、何を言われるかわからなかったら、すごく怖くて、誰かの講演とかがあって、そこから感想とか書いていて、講演した人とかは「同和地区の人間です」とか言うじゃないですか。それで、友だちが「どんなことを書いたの？」と聞いてきても、感想に「私も同和地区です」というような、自分の本当に思っていることを書いていたら、それを友だちに見られたらばれると思って、いつも、ドキドキドキドキしているんです。

人権作文を書いていて、自分にとっては、家のことが一番身近にあるので、家のことを書いていて、それを発表したくても嫌で、読まれるのも嫌で、今の私のお母さんも同和地区の人で、私のお父さんも同和地区の人で、おばあちゃんが、お父さんもお母さんも同和地区なのに、部落内外ではなく、部落内でも、家柄とか上とか下とかを決めるんですよ。

誰かと友だちの家に遊びに行くって言っても、今は言われんけど、中学1年の頃だったら、「その子って、部落の子なん？」って聞かれて、「そんなの知らん。」って言ったら、「あんまり自分のこととか言われんよ。」とか言われるんですよ。それが、嫌で嫌で、高校の話になっても、「この高校に行きたい」と言っても、「そこら辺の高校って、部落ってあるんえ？」って聞くんですよ。「そんなこと、関係ないで」と思うんですが、そんな家族が嫌で、でも、それをなおしたくて、私が話をすると泣きながら聞いてくれるんですけど、言われることは同じです。

私のお母さんのことでも、周りからの視線はやっぱ痛いし、周りから「お姉ちゃん？」と聞かれても、「お母さん」と言ったらみんな引くんですよ。「その何がいけないの」という感じなんやけど、まだ、自分からはそういうことが言えないんですよ。聞かれても、嘘をつきたいし…、自分の家族のことを話したくないんですよ。

友だち関係がつぶれるのも嫌だし、どう思われるかと思ったら、すごく怖いし…、ビクビクしながら生きたくないし、それを考えながらいるんですけど、人権学習とかがあっても、みんな黙っていて何も言ってくれんし、私1人しゃべっていてもおもしろくないんで、自分も段々しゃべらなくなって、雰囲気が悪くなっていくんですよ。そういうのが嫌で、2年生の時はすごくしゃべりやすくて、いつもどンドン言っていたんですが、私が同和地区ってことはずっと言えなくて、でも、今年、西部の方であった「止揚の会」で、

先輩とかがみんな普通に、「私、同和地区なんよ」とか言っていて、「私は言えんなあ」とか思っていたんですけど、そこで私もスツと言えて、「ああ、言えるなあ」って、その返事が以外だったけど、勉強しているからそう言ってくれるのかなと思ったんです。

でも、この頃はこうして話せるようになって、すごくうれしいんですよ。今から生まれ変わって、スタートだと思えば、同じ人がいたら楽になるっていうのを、同情を求めているだけかもしれないけど、でもすごく楽になりました。

言ってから、言わなければよかったと後悔するけど、みんなが真剣に聞いてくれるのがすごくうれしいので、これからもこういう活動を続けて、家族の間違いとか直したいし、仲間をどんどん増やして、みんなでつながっていったらいいなと思いました。(拍手)

《コーディネーター A》

(しみじみと)言葉が心に染みます。私の祖父や祖母を思います。同和問題のことを問うた時に、顔色が変わった祖父を思います。祖母を思います。重いです。この差別は重いです。それをなくすという取り組みに、そういう教育に出会っていなかったら重いです。「いつまでそんなことを言うんか。」「聞きたくもないわ。」そんな思いにずっと耐えて耐えての人生なんです。

でも、人間は変わりうる。そんな関係を私は作り続けたい。啓発の営みは、なかなか結果が見えません。人権教育・啓発というのは、橋をつけるようにスツとはいきません。道路をなおすようにはいきません。でも、人間を信じ歩き続けていきたいと思います。いっぱい思いのあふれる時間にしましょう。

《フロア M》

あの、私も鳥取県から来ました。人権教育推進委員に5年前になりました。そして、最初にSさんに指導を受けました。役場関係では、こちらにおられるFさんに会いました。

Dさんとか、Cさんとか、私のことは全然ご存じないと思いますが、ビデオを通して私はお2人のことを聞いています。素晴らしい人だなあとあって、今日来ることをとても楽しみにしていました。

話を聞いて涙が出ました。Dさんの家族を思う気持ち、これに大変共感しています。Dさんが差別電話を受けた時に、Cさんがそれに答えてくれた。その仲間のつながりというもの、その信頼関係にすごく感動します。そして、今、A先生が、信頼し合える仲間づくりの場としてこの場があるとおっしゃったので、私自身はまだまだ歩みは足りませんが、信じ合えている人に巡り合えたので、ちょっと語ります。

私は、この仕事を請けた時に初めて差別というものを受けました。どんな差別かといいますと、あからさまには言いません。人権・同和教育というものを否定されました。今までは、そういうことを言われたことがなかったのに、この仕事に出会った私を避けると言われました。「なぜ?」「なぜ?」という悔しい思いを感じました。そして、それを家族に言われた時、どうしていいかわからなくて、家族をどう言ったかという、「ええかげんにせえよ」というふうに言いました。

でも、私は、A先生に出会ったり、他にも色々な素敵な先生に出会って、素晴らしい生き方だな。そういう生き方につながっていきなという思いを持っていたのでとても辛かったです。どういうふうにしていいかずっと悩んで、何か会った時にはつながっていきなという思いから、少しだけしゃべりたいと思いました。

でも、しゃべりたいと思っても涙が出てしまってだめです。でも、泣いていたのでは相手に伝わらないから、自分の思いをきちんと伝えなければいけないと教えてもらって。…伝えたいと思いましたのは、やっぱり、目の前の人を大切に生きるということの素晴らしさ。それを作っていく場を広げていくことの大切さと素晴らしさを感じています。

ここに来て、皆さんの発言を聞いたり、会えたことを力にしたいと思っています。中学生の皆さんも、前に座っていらっしゃる生徒さんが、自分のルーツを話してくださった時、「素晴らしいなあ。こんな子どもさんが育っている」と感じました。

さっき、Fさんが娘さんのことを話されました。とっても素敵なお娘さんなのですが、結婚差別を受けたということを聞いて涙が出ました。こんなことを許してはいけないなということをこの会に来て強く感じています。どうもありがとうございました。(拍手)

《フロア 中学生》

ええ、さっきの女の子の発言は、ここに来て聞いて3回目です。初めてこの話を聞いた時は、正直言って衝撃的だったし、僕は小学校の頃から知っているし、「最初に言った」と言っていた会に僕も参加しています。その会で、「僕、部落出身です。」「私、部落出身です。」等、みんな自分の体験談を話していたんですけど、僕は部落出身でも何でもなくて、「俺がここに居っていいんか」とか思いだすんですよ。

みんなが自分の辛いこととか言っているのを、同情もできん立場におって、どっちかといったら、差別をする方の立場におるかもわからんのに、こんなところにおって、逆に、俺がこの中におったら、変に思われるのと違うかなとか思えだすんですよ。

だけど、そういう会に参加していたら、逆に、差別をしている人を見たら、「何でおまえこんなことをするんだ」と思いだすんですよ。俺らは学習しよるけど、何でおまえは悪いことってわかっていてするんだって、腹が立ってくるんですよ。いじめや差別に敏感になってきたんです。

結論を言えば、…差別にしてもいじめにしても、差別される側や、いじめられる側だけの問題じゃないと思うんです。する側、される側だけではなくて、見ていて知らん顔をしている側というのが絶対あるんですよ。そういう人らが、自分からいじめや差別の問題に飛び込んでいかなかったらどうにもならんと僕は思います。クラスで話し合いなどをしても、誰かが意見を言っても、それについて、「ふうん…、頑張ってるな」とか、そういうことを思うだけではないと思うんですよ。やっぱり、こういう場に来て、集まっている人の意見などを聞いて、自分からこういう問題に入っていかなかったら、どうにもならないと思います。

言っておきたいんですけど、今、県外も県内もいろんな中学生頑張っています。Dさんや、Cさんたち2人に負けなくらい、熱いものを持っていると思うので、応援してください。(拍手)

《コーディネーター A》

休憩を取らずに、少し早く終わりたいと思います。いかがでしょうか。はい。

《フロア 男性》

四国中央市から来ました。去年、今年と参加させてもらっています。さっき、Aさんが言った部分で、Dさんと奥さんに話をいただいたところにも参加させていただきました。「自分を語る」という部分が、非常に難しいなということを、自分自身がものすごく経験したことを言わせてもらったと思います。

僕は見ての通り、「障がい」を持っています。「障がい」を持ちつつ、いろんな活動をやってきました。この「障がい」を持っていることを、みんなの前で話ができしたのは、ごく最近だったです。わかっている人の前では、しゃべることができるんですが、本当に、全然わからない人の前でしゃべることは、今まで一切できませんでした。

それは、今、Dちゃんとか、Cちゃんの言った、本当にしゃべった時にどうなるんだろう。その不安というのが、私の中にもありました。でも、本当に、自分の置かれた立場をしゃべらなければ理解をしてくれない。僕自身が、それに気づかせていただいたのが、2年前、Dちゃんや、Cちゃんが来てくれて話ってくれ

た。あの時だったと思うんです。でも、それから2年というもの。自分自身がしゃべろうと思いがらしゃべれなかった。でも、先日、やっとの思いでしゃべることができた自分があったように思います。

「障がい」者問題も同和問題も同じ部分があると思うんで、これから自分の中で、「障がい」者問題と同和問題をどうつなげていくか。これを語っていけるのは僕自身だと思っております。頑張っていきたいと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

はい、いきましょうか。どうぞ。

《フロア 男性》

僕も、さっき、部落外で「止揚の会」に参加していると言ってくれた人と同じで、部落の子でも何でもない立場で、傍観している立場そのものなんですけど、ある日、父さんと話をしたんですよ。

それまで、全然そんな話をしていなくて、でも、面白おかしく話をしたりとか、真剣な話とかしたくなって、学習会に参加すると父さんに言った時に、「部落差別を受けていない子が学習会に入って、部落の子たちと接していくのが本当に難しいことだぞ」と言われて、俺もその通りだと思って。…その部落の子たちを「かわいそうだな」と言う人は、それは、同情しているのではなくて、上から部落の人たちを見ているからその人も差別をしているんだと思います。僕も学習会に行って、たくさんのことを学んで、部落の人たちと交流して、部落だからと差別することがおかしいと思っています。

さっき、俺の右側の子が、部落であるということを言ったんですけど、初めて聞いたんですよ。小学校から一緒に、無茶苦茶元気で明るくて、すごくひかれたこともあったし、そんな子なのに、部落差別とかで縛り付けられて、自分を表現できないというのがすごく悲しくて、自分も力になっていけないって情けなくて、だから、俺は部落の子とかに関係なく、人に優しくしていくことを人間として深めていきたいと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

時間が迫っています。後1人か2人、お願いできたらと思います。

《フロア 中学生》

私は、この会に初めて参加しました。参加した理由は、担任の先生から、「参加してみて」と言われたので、ジュースを買ってくれるなら行きます(笑い)って言って、先生が「じゃあ買ってあげます。」(笑い)と言って来ました。

最初、A先生がコーディネーターって聞いて、「ええっ?」と思ったんですけど、本当に、「誰か来るのかな」と思っていて、ここに来て、「結構いるなあ」と思ったんですけど、聞くことに対して本気ではなくて、A先生のこと最初見た時に、「何でこんなに普通に自分のことを語っているんだろう」と思いました。

髪の毛とかも、7:3じゃなくて8:2くらいだし、(会場内爆笑)最初若々しかったんですけど、今はおじさんみたいだなとか。自分は部落出身だとか笑顔で話していて、実際、「部落差別とか、もうないんじゃないか」とか、どうせA先生世代で終わっているんじゃないかとか、勝手にそんなことを思っていたんで、ここの話を真剣に聞くかどうかわからなかったんですけど、実際、若い人が差別で苦しんでいるということがあったなあと思いました。それに、今も中学生の人でも部落問題にすごく悩んでいるんだなあとか感じました。自分も部落出身じゃないので、詳しいこととかわからないんですが、やっぱり、今もあるんだなあと思うとすごく思いました。

北島中学校は、部落出身の子はいないと勝手に思っているんですけど、みんな、あまり同和地区とか、場所とかも知らないと思うし、実際、中学生とか同じ年代の人とかも差別を受けているとか知らないと思うので、是非パネリストの人には、北島中学校に来て、しゃべってほしいなと思っています。A先生、予定とか…。(笑い)是非、若い人たちから話してもらう方が、今もあるんだなあとすごく思えるので、是非お願いしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(ニコニコしながら)ありがとうね。私も若いつもりなんですが…。(会場爆笑)

《フロア 男性》

こんにちは。自分はC先輩と、D先輩の1年下で、C先輩は、自分の1年上の生徒会長で、次に僕が生徒会長をしたんです。(会場から感動と驚きの声上がる)

ちょっとA先生が怖いので発言することにしたんですが、(笑い)自分が小学校の時、全体学習みたいな学習をして、板野中学校に入って、全体学習をしたんですけど、中学校2年生の時から、自分の地区の学習会が、参加者自分1人で、他の子に「来ないか」と毎日声をかけたんですが、卒業まで誰も来なかったんです。自分が思うには、部落出身の子が部落問題を避けすぎているかなと思うんです。

部落外の子が、最近力を入れているような気がするんですが、「部落内の子がもっと力を入れてほしい」と、自分は思うところです。(拍手)

《コーディネーター A》

後1人くらい。はい、お願いします。

《フロア 中学生》

部落差別とか、そういう話ではないんですが、おばあちゃんが1人暮らしで、家も新しく変えるということで、お父さんとお母さんが「一緒に暮らそう」と言ったんですが、おばあちゃんが身体の調子が悪くて、入院生活をしていたんですが、「一緒に家具だけ入れておこう」ということになって、家具とかを取りに行ったんですよ。

今でも覚えているんですけど、片づけが終わった頃に大家さんが来て、大家さんはなぜか土足なんです。でも、私たちは靴をちゃんとどこかに置いて入っていたんですけど、小さかった自分は、「あれ？何で大家さんは靴をはいているんだろう」というくらいにしか思えなくて…。でも、今思うと、それって、おばあちゃんのこと、お父さん、お母さん、小さな弟のこと、人間って思っていなかったんじゃないかって思うんです。

今、A先生が来て、こういう人権の学習について勉強していて、DさんやCさんの話を聞いていたら、大家さんだって、こういう行動なんてしなかっただろうし、もっといろいろ違うことができたんじゃないかって思います。だから、A先生が来て、最初「なんて暑苦しい先生なんだろう(笑い)」って思っていたんですけど、今思うと、自分の思いを言ってくれたり、自分が知らなかったことをたくさん教えてくれたりして、本当に北島中学校に来てくれてうれしいと思っています。

自分のおばあちゃんと同じくらいの方が、差別を受けてきたんだと話してくれて、その時、私は泣くことしかできなくて、でも、おばあちゃんは、私が泣いているのを見て、「ありがとう。私のために泣いてくれてありがとう。私たちの時代ではこういうことがあるけど、あなたたちの時代では、こういうことをなくして行ってほしい。」と言ってくれました。

本当にそうならくれたら、自分でそうやっていけたらいいなと思います。A先生、これからもよろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

ここでフロアからの意見を閉めさせてもらって、最後に、前の3人に一言ずつ語ってもらいます。いろんな形で、この場にいられている皆さんの言葉の温かさを思います。ジュース買ってくれるからと来た子もおるでしょう。(笑い)鳥取から来てくれた人もおるし、職場の割り当てでという、たまたま来た人もおるでしょう。役員としての立場で来た人もおる。

ここに参加したきっかけはいろいろあると思います。でも、たまたま出会えたんです。会場いっぱいの皆さんと出会えたんです。ねえ、一生懸命の言葉と出会えたんです。このことを、私たちの日常の中に、私たちの家族の中に問いながら、みんなが自分の言葉で自分のことが言える、おかしいことがおかしいと言える。間違っていることが間違っていると言える。うれしいことがうれしいと言える。そして、私がこんなに大切にされているという思いが実感できる日常。私の周りにはいる人がこんなに愛おしい。こんなに大切に思えるという日常。そういう、温かい人間関係をつくり続けていきたいと思います。それでは、最後は3人をお願いします。B先生からいきましょうか。お願いします。最後ですから拍手でね。(拍手)

《パネリスト B》

先ほど私が話をしたことなんですが、「何でそんなことで悩んでいたんだ」と思われたと思います。私は、全体学習をした後で、一言言われたことがありました。「貧しかったとか、学歴がないとかいう問題と同和問題は違うからな」と…。

でも、私が「人権」を考えていく中で、どうしても通り抜けなければならなかったのが、私の父のことでした。そんなふうに、人って、心の中に抱えているものはみんな違うんじゃないでしょうか。それをじっくり見つめてみた時に、「人に話したくないなあ、これは…」 「人に隠しておきたいなあ」と思った時に、「これって同和問題とつながる問題がたくさんあるんじゃないか」と、みんなが考えてくれたらなあと思います。

私の中では、ここ(父のこと)が、スタートだったんです。人にはそれぞれいろんな立場の人がいるように、いろんな思いを抱えていると思います。じっくり自分と向き合うこと。それが人権を考えていくスタートではないのかなと思います。

さっき、中学生の女の子が、自分が部落出身であるということをしゃべって行く中で、他人はどう変わっていくんだろうと考えると、なかなかしゃべりにくいという話がありましたが、言葉は返ってなくても、みんなの心の中に届いていくものが絶対あるはずですよ。

それがすぐ返って来なくても、2年後、3年後、自分が結婚する時、結婚のことは、私はあまり語れないんですけど、いろんな岐路にぶつかった時に、友だちの言葉が、友だちの熱い思いが、よみがえってくると思うんです。だから、負けないでしっかりと自分の思いを届けてほしいなと思いました。

今日、私の現在勤めている学校の子どももこの会場に参加しています。いろんな人の思いを聞いたと思うので、きっと、「ここがスタートになった」という思いを持ってもらえたのではないのかなと思います。つたない話で失礼しました。ありがとうございました。

《パネリスト C》

今日、本当にすばらしい会にこういう形で参加できて、非常にうれしく思います。中学生もたくさん来ていて励まされました。中学生の子の中に、自分は「地区出身だ」とか、「地区外だけ」という話が多かったんですが、僕たちの世代の全体学習という中にも、「Dとかは、自分が部落出身って言うけど、出身でな

「私たちは何を思ったらいいの？」こう、発表してくれた子がおって、「どうだろうなあ」みたいな感じで思っていたんですが、地区出身の子というのは、差別に負けない力をつけなければいけないと思うし、地区外の子は差別しない力というものをつけなければいけないと思うんですよ。

それぞれ考え方は違っても、結論的には、共通していることだと思うので、横にいる自分の友だちだと思っていた人が差別をするということも現状だと思うし、その時に、自分はどうやってやれるのか。そこで差別者になるのか。それとも、泣いてでもいいから、「それは違う」「何で差別するんだ」と言えるのか。

自分の本当に信用する友だちが差別をしてしまった時に、こっちが勝手にいろいろ思ったりするんやけど、自分と向き合うということは大事なことだとは思うんやけど、やっぱり、自分の中で大事なことは大事。友だちが大事だったら大事。これは基本だから…。

縛られることもなく、自分の大事にしたい友だちは、自分も助けてもらわないかんものだから、本音でぶつかって行ってほしいし、僕もしていくので、差別をしてしまったら、そこで、「あ、差別をしてしまった」と気づいたらいいと思うし、そこで自分がそこで変わったらいいと思うんですよ。

僕も、会社の友だちが来とるから言うんだけど、自分は会社におって、一緒に仕事をしているこいつと、ちょっとやりすぎたなということがあったりした時に、「すまんあ」と言った時に、これは僕たちの関係ができてから別に気にしませんよ。心を分かり合っているというか、逆に慰められているというか、ええやつだと思うし、こういう関係をつくって行ってほしいなとみんなに伝えたいです。ぜんぜん「ひとごと」でなくて、「わがこと」って考えて行動してほしいと思います。(拍手)

《パネリスト D》

今日は、この会に参加させてもらって本当にありがとうございました。

最初に、A先生が僕の「生活ノート」のことを取り上げてくれたんですが、これは本当に、今考えても辛いことだし、さっき言った様に、「腹の立つこと」と思う部分もあるんですが、例えば、「なぜこの人はこういうことをしてしまったのか？」とか、いろいろないじめとか、差別発言のある中で、「なぜ、こんな差別をしてしまうんだろうな」って思うんです。これは僕にもわからんし、知らない間に差別をしているのかもわからんし、でも、とにかく、僕を含めて一人一人が自分自身の思いというのを見つめ直してほしいんです。

僕の場合も、こうして話をさせてもらっているんですが、ドロドロした嫌な気持ちというか、そういうものもあってしまうんです。今日こうして話をしたけど、でも、やっぱり差別しているということもあるんじゃないか、俺にもしんどいことはあるじゃないかとか、本当にいろいろな思いはあると思うんです。

話がまとまらなくなってきたんですけど、自分の持っている意識はありのままでもいいと思うんですが、ただ、差別をしてしまう行動とかは、本当にあって欲しくないんです。いじめとか、人のドロドロしたような意識というのは、できるだけ少なくなって行ってほしい。せめて自分の周りだけでも、そういう意識を持って高め合っていける関係を築いていけたらと思うんです。

僕の「生活ノート」で、「こんなしょうもないことで悩むのは僕だけでいいわ」って書いていたんですが、今日、じいちゃん、ばあちゃんが来てくれたけど、こういうことを今日までちゃんと言ったこともなかったし、こんな話はしたくなかったんで、…でも、やっぱり事実は事実で、僕はこういうことがあったけど、本音で語り合える仲間があったから、仲間に思いを言えたから、そういう関係があったから、今の僕があったんではないかなと思うんです。

だから、こういう安心して語れる関係づくりや仲間づくりというのを、僕はこれからも自分がしていきたいし、お互いが高め合っていける関係というものを、まず家族からつくっていきたくと思います。じいちゃん、ばあちゃんは、いろんな思いがあると思うんやけど、今日、話を聞いてもらって、本当にうれしかったです。今まで、「人権の会に行つて来るわ。」と言って出て来ていたんですが、いろんな場で意見を交換して、

思いを語り合ってきました。そういう中で、今の僕があるんだと思います。

(生き生きと)絶対この問題というのは、許したらいかんことなんですが、何かこう、重いものではなくて、楽しいものではないかなと思っています。僕はこれからも、家族仲良く仕事も頑張りながら、こういう様々な人権の話とかしていきながら、生活していきたいなあと思っています。今日は、本当に皆さんありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

本当にありがとうございました。本当の気持ちが語り合える。家族の中で、職場の中で、地域社会の中で気持ちを伝え合える。周りにおける一人一人を、本当に大切に思える日常を作っていく。そんな営みを頑張っていきたいと思います。

板野中学校の子ども達との出会い、それを、大きな大きな宝物としながら、今、北島中学校の子ども達と歩き続けていきたいと思います。会場の皆さん、今日、長い長い3時間に及ぶ研修会。休憩も取らず本当に我慢させました。

でも、この場においていただいた皆さんに心から感謝を申し上げます。一生懸命聞いてくれた皆さんのまなざしが、皆さんがかもし出す雰囲気、一人一人の本気の発言を生んでいきました。私たちがつくる雰囲気、私たちの表情、私たちの輝きを大事にしていきたいと思います。

年に1回の研修会です。中学生がいっぱい来てくれました。なかなか、年代を超えてですね、中学生・高校生が発言する場にいる研修の場は少ないと思います。こういう場がある鳴門の地というのは素敵だし、そこに県外の方もおられるし、地元の方もおられる。いろんな立場の方が発言される。

出会うということは素敵です。最後に、北島中学校の子ども達が、7月に職場体験の学習を体験しました。その中の何人かの子が介護の仕事を経験しました。その、介護の仕事の中で、おじいちゃんやおばあちゃん達と触れ合う中でつくられた3つの短歌を紹介して、この会を閉めたいと思います。出会うことです。知ることです。中学生の感性にやっぱり心を打たれます。紹介します。

2日間、おじいちゃん、おばあちゃんのお世話をする中で、いろんなことを教えてもらいます。おじいちゃん、おばあちゃんの姿に、いろんな思いを持ちます。こう綴っています。

苦しげに 痰を詰まらせ 座ってる 何も言わずに どこかを見てる

関わっていく中で、おじいちゃんの姿に、深い深い思いを持ちます。もう一つ、こう綴ります。

ある人の 部屋の中には 2つだけ 湿った布団と 家族の写真

深くおじいちゃん、おばあちゃんの暮らしを見とるんです。自分の家族に思いを馳せるんです。そして、2日後、つながりの中で、最後の別れの場面をこう綴っています。

おばあさん おくちもごもご 何言うの? 耳を澄ませば 「ありがとう」

「ありがとう」という言葉が美しいです。「ありがとう」という言葉が心に染みます。今日、一生懸命語ってくれた仲間に、心の底から「ありがとう」。フロアから一生懸命思いを伝えてくれた皆さんに「ありがとう」を言います。そんな発言を一生懸命聞いてくれて皆さんに、「ありがとう」を言います。

その感謝の言葉を大切にしながら、私は人間を人間として大切にできる日常を精一杯生きたいと思います。それが、この学びのよこびだだと思います。一生懸命語ってくれた仲間、また、フロアの皆さん、それを聞いてくれた皆さんに、最後に拍手をしていただいて、この会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(会場より、大きな拍手が起こる)

終了